

204
152
2

戲作者考補遺

後編

野崎左文氏遺書
門野重九郎氏所贈
昭和十年十月下旬
慶應義塾圖書館



訓子桃山山人拾遺のふし司馬是より来る

名はつて西川王出たてしはふしより来るはつて西川王出たてしはふしより来る

知泉亭和歌集のふし司馬是より来るはつて西川王出たてしはふしより来る

のふし司馬是より来るはつて西川王出たてしはふしより来るはつて西川王出たてしはふしより来る

淨瑠璃の作あふふし司馬是より来るはつて西川王出たてしはふしより来るはつて西川王出たてしはふしより来る

遊びて狂ふの作あふふし司馬是より来るはつて西川王出たてしはふしより来るはつて西川王出たてしはふしより来る

室相堂より来るの文収たてし十年六月二日病に罹る

論北条研表所中寄山最勝寺の事

慶應義塾圖書館

鳥亭焉馬 寛政五

市原精澄

牛村家藏

別号桃栗山人枿發齊狂哥に野見たりあぐさみく移此
名所本所相生町五丁目小住居一むと大工の棟梁あり俗稱
和泉屋和助性ハ中村名ハ英祝と云ふ又談洲樓といへり戲作
の古老にして安永天明寛政年間まで一枚摺洒落本又ハ
淨瑠璃の作あり且久しく廢せたる落し咄を再興し戲場
遊びて狂言の作を補助し草々りしを著作せしハ寛政五年
を初めとしこの文政五年六月二日病歿す卒時行年八十
也北本所表町牛寶山最勝寺に葬す天台宗法號

三樂院壽德焉馬

墓面に辞せり

思ひきやかくら乃花を今ぞう
る 此敷島の道

是よりさき文政三庚辰年五月廿一日病歿せり

妻女の墳墓ふ

むしし純文字も此さつき廿一日妻の別きをありい

御をたのりけさうめをくきりのふい可おもや一物さのえさう

法号

一元院妙空松貞大姉

門人

朝寐坊むくえ祖

談洲樓麟馬 日本橋青物町住り塩醬油を商いて業とし
号受継初ハ花園亭ト云狂哥名高

立川金馬 落話の弟子後二代目朝寐坊夢羅久ト改

烏亭焉馬



式亭三馬



立川銀馬

岩井町住居俳諧を好む

立川友馬

お咄の弟子改て堅石亭白馬ト云

發田芋助

寛政五

春道草樹

可候

画、前北齋

白山人号也

坪平

寛政六甲寅

本膳亭ト云

築地善好同

式亭三馬

寛政六ヨリ

本町二丁目 禹屋太助ト云

本町二丁目西側

文政五年以前、東側あり

居住ト云家制衣の業を習て業

と云俗称西宮太助本姓菊地名久徳ト云遊戯堂洒落齋哆囉哩樓四季山人遊戯道人あんどの舊号あり近頃戲作舍滑稽奇本町庵乃号云々ト云

墨川亭ト云

三馬大人の父ハ八丈島ある爲朝大明神祠官菊地壹岐守が妾腹の男子割とん願が師しみく菊地茂兵衛ト云へり安永四乙未年浅き田原町三丁目小生る文政五壬午年閏正月六日病歿卒せし時齡四十八才深川雲光院に葬る法号

歡譽喜樂奏天

○中橋書賣北林堂一年予が菴を訪ひて何れ物語のついで
に三馬を幼きより僕が家に仕へ長ぶるに従ひ頗奇あり
十七八歳の以始て戯作をせぬ後山下町の書賣萬を太治右衛門
号蘭が家に嫁とありしか配偶乃女病とみまかりし後彼家を
香堂
出く四日市に古本類を商ふ小店をせきき其日より
戯作をせしむ石所新道にト居せり近く本町へ移り住り
西宮を名けりハ春松軒西宮新六と懇意ありけりひたる
との話

文政三壬辰正月十六日予肇く本町店に面会し知己とある
前年文政二
己卯秋浅草中において諸人の競ひ視る籠細工の観物
よりおのひゆる戯作あるを號く時の花といへり様に上人の

心ありと綴て小冊とあり是を大人に見せたり大人一覽の後
小云御作まことに感ぶるに餘りあり吾門人三鳥が梓ありたふ
籠細工見物譚あり勝る趣向といへると惜る文辞古びて當世
の風ならぬと笑ふのち種々の物語も及びがその日彼小冊を
あむり貸し給ふといふ所により彼大人はがてまかりつまゝ其のち
かの許を訪たりしが當時世俗の流行詞はつもお若しとていふ
そのやうに行きしをり大人の素より狂歌をよみて數寄屋翁
をよめて其餘諸大家は文更く著述は狂歌鰯なりてその
道あも長びていふも大人が笑種ありとて予もその流行詞を
とりて一首の腰折をりけり大人は是をそのやうに哥に
もやり詞さうりちぐと達摩さんいつもおあういめいといふむかり

大人予ふあめさるゝ此狂歌ハ書画の會席上めてものに賛あど
乞きて即興するあはしといへども近侍の狂歌ハ得あふべと
笑ふが後五七日を隔て面會のをり主人云已いぬる日さる席
上あふかゝる詠めとすされゝるさき哥に

さき堤老木もと記はおくれずといひもお若いさのかむせ
予あゝ青柳とくる影め

さえかへり山と霞の頭巾きて免むかりいふは峯の青柳
といふをわづつけていふと家はさえかへりの五文字おどやうあ
秘むうらうとあめふべといふもあふはつけとおめいふも
それあて山も霞の頭巾とくるがよくあはるおろりあふの
日大人が狂文あふりのせむさしとる諸店の報條といふもの五

むふ六むふ及びだうけ百人一首といふ小冊は序文を書れ。一冊
おあふられと日外貸おちふ予が拙著を返され

○一年彼大人書画帖をかゝる贈ふとる

爺ハ山の東方朔婆ハ川の西王母三千年はむわく
遐齡延壽の一助さるえや僊家の桃いあふと

おろ桃の根どひ葉どひれかゝいのちもそれれ種ぞのちる
○文政四辛巳の暮本町庵を訪ひてあふのつゞく已き去年
の夏寫山樓は遊びといひ彼大人の内室が物語おしれたるの流
行唄あふあちよちづらふさこめといふ囃子ありしを本町庵三馬
がちづらのざれ歌に詠いといふ或人の來て物語あふてさな
されといふとそれさへはも変化ふべと大人あふのがうらふ

そい去年の春れるやうにその狂歌かいばとて進ぎんとて侍は
左の原物寫料はそあへらむとる薄美濃紙はとあへば
かたづけ送らむとるざし歌じも

榮之翁乃書画會ありける時隅田の櫻のこゝ画くるふ
隅田堤老木と時はおくそすくともお若い花の白むせ 三馬
狂歌堂真顔翁侍はおりのるが我も流行はおくせじ
とて文晁翁が蝶のこゝ画くる扇は

今もやる人乃書くる繪扇は蝶く靜に腰へさくこゝめ 真顔
猶おのこゝめと歌よめとあうりむむとむの下み

今もやる蝶く靜はよふれてい急に趣向もさうや又ありけり 三馬
時ハ文政の三とせ弥生もめつとさうき 式亭書

○書画の會席はおくそ画乃のこゝめ應じとるあへば狂歌のされ歌
城ふちみあへば書くる人よあへるめけハ三馬と故馬馬のこゝ大
うこハ双ぶとのあへるこゝめし當意即妙奇とらふる

まゝ一時大人さうか物語くいへるこゝめハ幼なりより伯母なるもの
その太守公の奥殿お仕へまゐるせられをりく伯母へ對面は
くかん奥殿へ至るこゝめに好む所なれむ傍にありけり冊子を取
て讀むその席へ来りけり仕女とらさの童ハ歳も似乳あ

書を讀むその拙るこゝめ今程よりかく文才は長されむ後ハい
る者にあふんやふんあといふれが十三五歳の頃までに数多れ
戯曲本をこゝめとくく覽竭く十六七歳の頃戯作の志あり
十八歳より獨りて始めて天道浮世出星操 三冊豊国画西宮
校寛政六寅年

刊行といふ黄表紙を著し出板し此冊子を作るも夜寐る
みと衾の袖より手をいづ稿を成し草稿成て後自ら戲
號をふづけんとてさるべきとありける兩三名を小紙にかい
つけその紙をいくをう捨て手づから傍に投てり紙又拾ひとるに
ゆるる所の拾紙を扱きかいけりあり戲号を則式亭三馬
とありふ是にて心を決し遂にこの号を用ひしうおほ
きて年毎に一兩部づ著作せしうち寛政十巳未年使太平記
向鈴卷三冊 西宮校といつるを著したるに人の嫌疑を得るその怒り
にふき遂は

公に訴らしむ輕かぬ御咎を蒙り書賈をたしめあはびお
父にもいさく勉強をわけしととやぐ賢き御免をわら

赦免を蒙りし後父いさむく戲作の業を廢せよと諭さる
からその道を捨て間一とせを隔てまゝ著述をあら
ぬるがの事よりして愚名まゐり高く近頃に至り雷太郎
の一作大に行きしより幸に年々評判はよく世人にりて
もやさるるにありきといはせぬ

○大人が綴る讀本に阿古義物語といふ五卷のり稿成て故
一陽齋豊國が許に稿本をうけしうと一陽齋いふる故あり
て次繡繪半にして其後をふつは画ぬばややく遅滞に
なびうば其故半より 本國貞が筆式亭憤を發しいふる刎頸の文より石き
をかくまでふ己戯蔑如あるその心根を悪しめとて自ら一陽
齋にいらまのあつりにその戯りて言ふその怠慢を責し

ふ豊國め言を盡し詔ふれどと式亭が怒とけむきより
何となくなほに隔心りできて此方あるハ吾作意ある冊子に
向後彼をて画しめといへむ彼方あるも彼が作たる冊子に
吾あつに画くまふと云ふあひが書賈伊賀屋文亀堂が
あつゝある双方和解し文化七庚申年文亀堂が上本せし
一對男時花歌川とある冊子と三馬子が編述せるとある前
編六巻を一陽齋画きてこし哉初日と稱へ後篇六巻を
一柳齋豊廣子画きてこれを後日と呼び初日後日二日替りの
とく執ふと云ふ所もあひ画めと云ふ所もあひて
一入興ふかく彫刻を細みいできく是をめて式亭一陽齋が
和睦の媒とあり文亀堂並市に及びうはめさじ殊に変わり
美しく面白文冊子なりとて看官の評判つよく行きたるやと
亡友一鳳齋國安子存生のうち物語りぬ

文政九戌年刻成る梅精奇談魁雙紙といへる讀本五巻を
浪速の書肆文金堂河内屋太助江戸の書賈仙鶴堂鶴屋
喜右衛門と云ふて合梓めり並市に及ぶ繡繪の國安ぬ
画りいぬる文政三辰の秋三馬子の草稿五巻を予に託
して淨書せしむたのし拙筆をめて認り本意なる所を
固辭しぬきども許さば遂にその意に隨ひ其毛をとりたれ
ども違筆にしてや翌春よりおとび辛ドて落成しぬ大人
予にいつゝ原稿の草紙のさるゝ豊廣が男豊清をて
画しめと云ふも彼不幸なりて世を早くし其画半より至るに

とてその画さへ繡繪三五丁を出し見せらばさてその後國
 直は画らせんとて稍久しく彼方へつらり置かれども出来ざれ
 ば取戻しとうそのをせしむるに巳の春予が淨書畢りてより
 およそ間一とせ経る戌の春國安子ガ筆めて出たり又
 一時たのき大人は語りたり頃日吾友ある光房とてふが講釈
 めく源氏物語末摘花の巻を聴めりがふもまことにさう
 戲作の扶助もとなりちんやと問たりむ大人答て素物
 語りけり隨一ありば諸人おほく和文辭をつらめるにたを
 けとせむふものなりといへども戲作者の素意はさるむつ
 うをせむあはれ貴君今より戲作をなして心を慰ん
 とのあはれひあをさむ源氏一部の講釈をきかば聴めり

[illegible]

○まゝ大人が冊子の稿を早ある時三日三夜あて凡六七巻或ハ八九巻の物を脱成あると志むくあり故に巻尾に三日

三夜急案とあるなりたる冊子も多くあり文化の初合巻
讀本俱^そり流行^り頃ハ三馬豊國等々諸方の書肆に種
本寫本を乞需らるゝふその約束の期ハ後迄^し謫らるゝに苦
しみ五日或ハ七日むりづ書肆の許に至り一問を借る
草稿を成し^し又ハ繪を画ぬとありた^るべ今日まで某甲が
二階^{ふたかい}に在る翌五日某乙が離^{はな}舎^やを行^きか^るゝ^るそれ^を廻^りく
尚^もと^もしめても手乃届^りで約束の期ハお^くしたる書房ハ
ハ責らるゝを苦^みて其行先を知^れば後にやう^な處^をみ^て
それが方に廻^り行^くゝとありしといへ^る昔ハ今の如く作者の
作料^{しやうりやう}漆賃^{しやうちん}なる^るあづけ^る潤筆^{じゆんぴつ}を取^とる^るふかりし^い京傳^{きやうでん}
ハ原^{はら}より潤筆^{じゆんぴつ}をとり作者稿本を書肆に與^よへる冊子の

幸に^し行^きし書肆の利を得たるなり^しハ求めざ^しども先
方よりその禮謝^{れいせ}として結^{むす}足^{たり}或ハ縮^{ちぢ}緬^{めん}一^{まい}反^{はん}ちんと贈^{くわ}り
あせ^りの^とと^と後ハ作料^{しやうりやう}といふものを定^{さだ}め作者の方へとる
ゝ^るとなり^し戲作^{ぎさく}をりて營^{えい}せ^ると^るなり^しハ出^で来^きたれ^を高^{たか}
金^{かね}を取^とる^る至^{いた}り^し猶^{なほ}且^{かつ}當^{あた}り^しの^はる^る時^{とき}ハ當^{あた}り^し振舞^{しる}と^るそれ
書肆^{しやうし}も作者画工^{しやうしやうこう}を伴^{とも}ひ或^{ある}ハ戲場^{ぎぢやう}見物^{けんぶつ}も^もたり或^{ある}ハ遊船^{ゆうせん}
に出^でる^るなり^し思^{おも}は^れ是^{こゝ}稗史^{はいし}の流行^{りやう}盛^{さか}なり^し板元^{いたもと}の利^りを得^え
ると百倍^{ひゃくばい}ある故^{ゆゑ}と三馬^{さんば}と^とづ^とハ話^わあり雪丸^{ゆきまる}あり^しらく^{らく}近^き
所^{ところ}ハいつ^{いつ}ハ當^{あた}り^し振舞^{しる}といふ^るを^をぞ^ぞは^は是^{こゝ}今^{いま}稗史^{はいし}の行^り
る中^{なかつ}古^{ふる}より^{より}ハ遙^{とほ}に衰^{しやう}る^る故^{ゆゑ}なる^るべし^しまた冊子の數^{かず}市^{いち}ハ昔^{むかし}
を^をえ^えみ^みて^てと^とる^るが常^{じやう}あり^しべ^べり書坊^{しやうぼう}ハ春^{はる}麦^{むぎ}を出^でして作者

画工をそと免刻摺製衣衣の人のをりてあせり

○大人ふ二代目芝全交ふあるべしと勧る人ありけりども世ふは拙くして空く古人の名を汚んぬといふとて止るよりをいつり著述

の樂室通おとび馬笑か他の廊節要は「式真三馬」古人三全交の遺言を此度より二代目の全文と可相成答に甘ゆ兵いやき

妄作を以て古人の高名をさるるに恐き有と存いまづ改名を不仕差むる罷在は猶不わ替全文傍と被思召り一笑を希し

○式真常は詠むる所の狂歌狂文の視聴しるをいさくらたふ

早春のとにあはぬ管の聲をえんぬりよかんにめるともぬ一ぬ

花吉原わちのちる花のより野より原も山口よりを咲ても免く歌

古今集序にいでまはる聲色を歌にのけりあか蛙鶯

遅櫻ちるちつまぐくといふまに夏いちよときふさひ

汝が春をまぢえりようを管よわのまちえり初音れりか

村雲よ邪魔りなくいりけぬちる目の入るき山みふきぐさ

瓢りて飲る胸のうむと耳にきくや水を聲

仲の町うらぬ客は大名を氣けりやもつめのさね箱で来る

人とも息をとりて白玉のあんどうをきえとる露

雪川初とつふ名ざはありてあくるまで跡つけり雪の中より

傾城ははとありといふ世いようといふ客やいひとめりん

買込にあら子一の富が岡でぢんの客にけりめのことりき

吉原秋夕さびさ乃いつあをいさどより原よりろを見える秋の夕ぐれ

焚火のにものたまひのころとれつめきあんといふぬ傾城

しつゝ家のいみじく五丁まぢの今をたもてはめ

日ちくれて野にひとしきで宿くはめさくけ寺のうらさく

ゆづの雪は初彫漆つらさを愛る傾城あそびを

あそびの空けし雪にうらなくく客もあふらん

一原の雪にむかり夜もまがらぬふきて嬉し居るけ日和

福祿壽助六
お拾得の賛

三芝居ふ花はく頃七福神の月の宴とまがれ遊ぶ君

あらゝるぞ命も長いきの福祿さんその針巻く

おはぶきの長くとあて福祿壽よこ針巻にひゆる江戸ぬし

福祿
壽賛

福祿壽あそびお名をいませとあそぶで知れ長いきの人

朝顔

種あつて数いさめくうり咲いく品玉をあそぶけり

三味線まうかき^た恵比須イヨううが鯛の濱焼やうや聲色

草摺をひきちぢう見よき餅をついてかぢんのあいのほよき

つるういさても妙法蓮華經うらみ水のあふだふ

色も香もさてうらがる普賢像小町様あはゆる粧ひ

女
の賛

うらういれいお真向をうとよこむき金の外面女菩薩

月木もふ目に立田山むしりも我あて猶うらまきりけり

月世の中にゑんて女のおけりせむ田かのかのけりかきま

月見と處如やなひきりかきひものそのあふり神なり羽織

月家と子代守り袋をうらとぬき氏神よりもちのうきさめ

奥女中お宿あり親の病氣を献ま椎茸とぎをうにほつへり

女中の
うら
とる
に

あそへをうらまひきり歌がうらとまてやふれやふのかきに

彩色をのちともいそげ繪のとい素人おちをりつてふせよ

狸酒に酔たる

を自身番の
もの介抱する
狂画の賛

富士筑波むさしふさ繪と文字とあ方に見ゆ西國の會
生醉に所をきけ狸いよりのいどわさざりちる

是ハ
眞顔

洗濯におちてぬがの奴風たひのあらでふさどせく

長いきの壽の字に猶も輪をかけて長いきをふく萬年の龜
名可すをきけ狸いよりのいどわさざりちる
小町とささふ水をや汲ふん

いひうけうさふ双紙の文字と共りあふさふさふさ

所作車の数い七色蕃椒ふさふさふさふさ

唐猫の人あふさふさふさふさふさふさ

と常は愛たまひい六條院の姫宮あり白猫の飼つち

たる馬うらしい程可愛うざんねと毎ふあづけさうい

三浦屋の薄雲あふさふさ

白黒の色になづむい鼻さ思案乃おの猫の妻恋

瀬川路考
似顔の賛

かあふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

のらうう鳶かあふさふさふさふさふさふさふさ

有と思へばあふさふさふさふさふさふさふさ

空則是色

奥山よりなく鹿よりもきく時を秋いこの秋猿丸が聲
如何祖師西來意九年面壁いなんざんに苦界十年御
客を壁とみ破る身と草の葉乃まゝぬうき
みちがた川竹の流りたる眞實い色客への操りて
不立文字あはききふとあしむ直指人心のめびきり
以心傳心の格子頭見性成佛の床の内もまるい本来無
分別きりるい心外無別法迷へば通も不通とあり
悟るべ不粹も粹とある柳巷花街翠帳紅国柳のみ
さう花いこれあるの禪味よひくるものあゝひたとひ禿は
いづらうとよぶともサ花もこれあひ客の心は色くお呼

駒下駄の呵囉々々喝

達摩さん腰ふ下を乍麼生女をふふも一物もな

月

片岡山に皆をふふ臥せ旅人客はあやあ
仲の町に駒下駄を進めあれ親あいの禿をくもれ
昼麁の坐禅お床も壁とむうあの人をよぶいササ
い葉の猪牙舐めうかきようくる浮虚の客あを
面壁九年十年の苦界の悟を開くもむとことほけら
觀法の関の中ふふ客いづるがや富者緒川は
流れの憂身は什麼さん家あておらんあや

さそれ客と間まよの戀の海よりあゝの葉はさうくへて
はるういお猿子賛なあるいなんと趣向が有田歌古衛門

志のれども山ぶのて成るうれしくかくさるる 獣の山
 浮虚の風は見通におとづき口舌の雨は棧橋にこるぎれ
 まつふいの心つきさを潮來節にいそをききぬぐの恨をハ幡
 鐘にかろみくくの廊下書に宵泊のききとふあせい
 のあいくの明烏小朝直のちんくあり密更ゆきめいお客
 ふよ客まゝ密更とぬる事い必は近いうちまゐる
 助六の入りあまほり木戸をまゝくふりゆきくお見物
 梅やき土まき竹のぼつと香いつみで送る木下川
 枝うつり目うつりもして梅なくあをきくこの庭の鶯
 新梅を
 七代三升が
 助六の初役
 をよめる

式亭門人

楽亭馬笑又樂山人ト号ス

浅草町土手下に住居四代目
竹本倉太又ト云

著述 手管早引 廊節用 三馬補正并序文あり

古今亭三鳥

同東仲町住薬種中買之後剃髪
俗称三河屋吉即兵衛

一亭三生

居所不知

此三個ハ式亭の舊き門人ト云

福亭三笑

日本橋邊の人と云々不詳

益亭三友

日本橋通一丁目藤丸膏藥を商ふ人の身心
ヲ方所に住居を後惣髪

二代目

福亭三笑

牛込に住居を、子跡の師あり著述ハ
仇文字トシの留書文政四年出板ト云々

一亭三子

藤丸膏藥を嚮て業と云々

徳亭三孝

小石川に居て米を商ふ狂歌を嗜み初め号成
一得高桃種成ト云々今ハ業を換て新川辺に
住居をセ代三升が助六の初役を妻と云々

異國までむく上手に成田屋が出端をかとうの蛇の目金

雪亭三冬

裏御門邊の人と云々

匠亭三七

別名盡語樓内匠といふを今知れぬる狂歌師あり

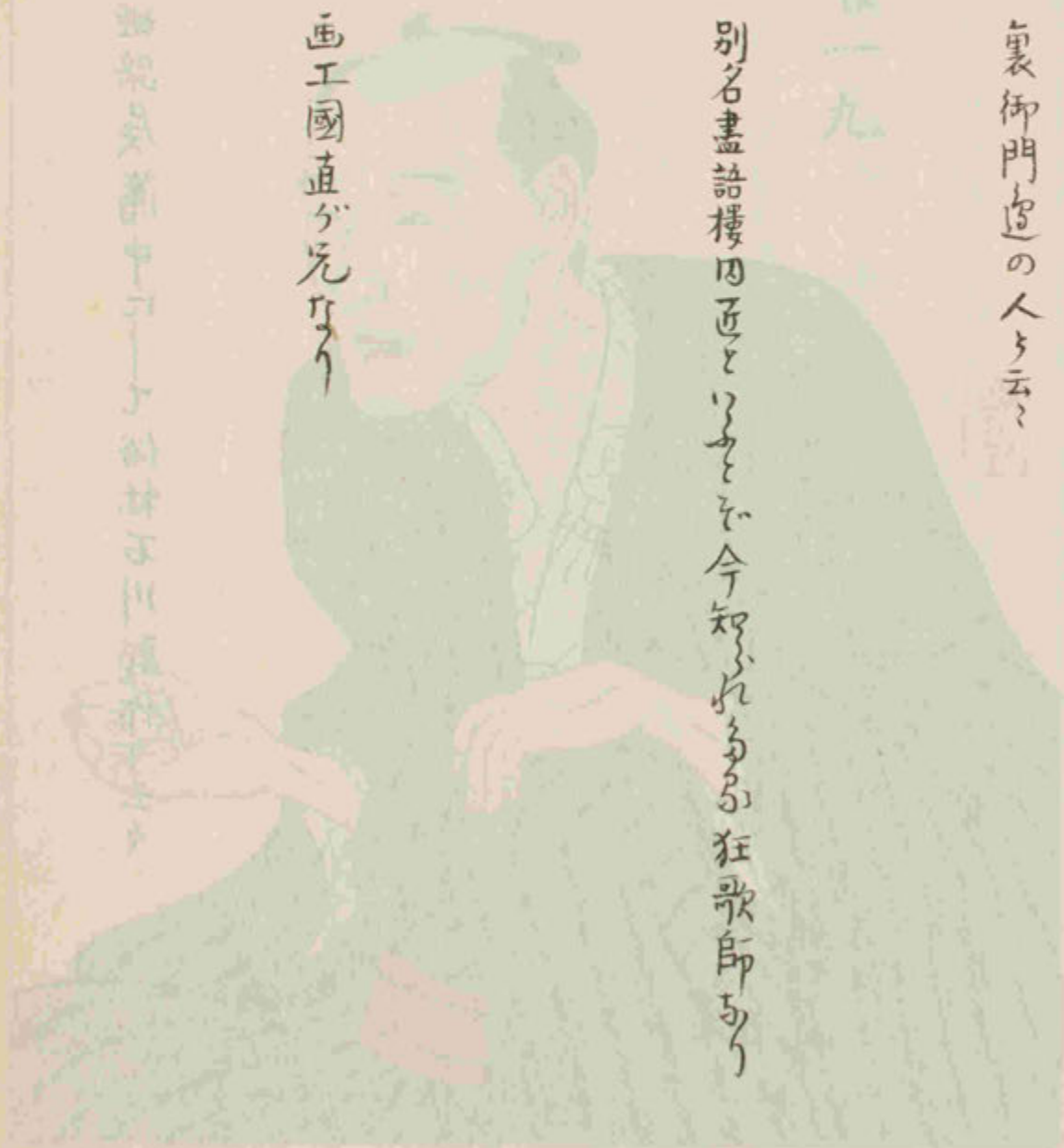
春亭三曉

二代
春亭三曉

画工國直が兄なり

一亭三樂

徳田氏前中よりハ新井ハ川橋



一亭三樂

姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

一亭三樂一丁目、姫路侯藩中にて俗祢石川郡作ト云々

十遍舎一九



十返舎一九 寛政七乙卯年

通油町書肆仙鶴堂が裏に住せり

初ノ橋町又深川
佐賀町にも住居

姓ハ重田名ハ

貞一駿河の産ありト云々 俗称與七

墨川亭曰

一九幼少時市九と呼ぶ故に市を一作り雅名とて弱冠の以

東都に出或侯館

一説ハ小田切侯江都尹にておとせし時ニ
その館にて注簿たりしと云々

仕へ其のち

大坂へ登り彼地に住て志野流の香道に称譽あり十返舎純

号ハ黄熟香の十返純とて然ふとつり其頃のとにや

並木千柳若竹笛躬と俱に木下蔭の繰り戯曲を編述したるは

後故ありて自ら香道に遊ぶるを禁む寛政六寅年復び東

都に來て始めて稗史西三部を著述して耕書堂が梓に上せて

發市せり○天保二辛卯年八月七日病て没恩

○文化十癸酉年予稗史通と標題して此の如く戯作者

浮世画師の小傳ありびみ印譜自筆の撰あんど書集て二巻と

あり人を見よべき心あり秘置しある日吾師墨亭月磨より

密に見せし我々醒笑て曰足下素人のうへにてい能き書集め

らんと誤れる事多けしと云ふいその答にこそと邊り近

く住る長亭五菜をまねきて拙著をりてさし示さるるに

長亭感ずると甚しく一覽の上その身の小傳あり印譜のそと

所藏の印をふとぐく押ふとせしそれより彼方にあと人子み

傳へて式亭をさし或ハ筆耕晋米あんど一覽あるに至り

終り十返舎の拙著を披閱せりとあん然るも巻中ある大人が

小傳は或人の曰一九子漂泊のち寺に門番をありたること
ありと書るを實に然るもの有るを世に知しむるは似るを惡
るれあり實事ありと云ふを噂するものに書載る露^{あひ}る
ふ似るを惡るれ心中に此事を怒りてみ居るとおぼえ
りける甲戌の春師墨亭が書画會延を油断北新道若菜屋
の樓上より一節十返舎の紺屋町ある一九とわけて親
しくば一九が亡妻の一周忌の佛事に招き酩酊の歸路師が
會席へ來りて豫て予とい師が許めて出會へ去年同の春が
知己ありきむ予を傍にまゐりて曰卒再あがさいつあ
貴君が書ぬるもの紙見ると僕が小傳に至る寺の門番もあり
たるとはうと書ぬるがものありといふある人より傳ゆるひて書

ぬるものやと問ふ予はさうかこより聞てその人の名に慥う知り
居たものと斯聞うとてい後いあるをいひ出さるも知れ
ばたゞ世の浮説をいふものゝ書うと答ふその時十返舎の
まうく氣色を變て云やう世の浮説を擧て世上へ弘めぬ
迷惑なり僕ハ戲作をりて業と云ふるを弘められて生
業の妨とありぬきを毎が上城と惡むに書ありて俸
禄も拘るべき程のうを書んと思へる心を得ぬや
つゝ答云いよう所理にあればも拙著に已し一個で樂
秘蔵のものと藏る人に見せんもの業も非ねむ梓に上て世
公はするものと云ふぬ隨筆の書りぬる原より家々に秘する
隨筆のい高貴縉紳家の忌諱のうをも書留おく尋常

のふくをりて何憚事なく書ぐ知ありあさび密平
師に身きくるより漏る侮が看あもひづりしあれば自今猥
他人よは見えそふくくを宿くぬくと詫つても一九の醉
を帶くる人にて高聲に以前の條をりて繰回し言
罵るあぞ傍の人にも氣の毒げは集ひ合兎角あつゝいぬきど
猶言やまだ予も敵手と酩酊のくゝ何時までも果あふれば
後日の論もあふ如くと思へ師の當日の會主く此よを
微細に告ぐべまづあつゝもうて侮い歸ぬといふを詞
まうせて予い歸りぬそのち師月磨も十返舎ふくして信
ななるにさる道理を言んとあふ平生の上よひんを吾會
席にりて出て言言るいとおふくくば吾も遺恨を言ふ

の有てよなるやあど腹をいふを日あむつめい朋友
の人々あふくとあふくそその日のふい納まふく十返舎と予
とのあひくそのあになくおきくく幸三五りを隔て予が同門
式磨が畫の會のりるきば此日あひみ出席して和睦をする
こよあふく式磨があふくく自ら予が方へ訪ありいぬ
日の事い十返舎まふくく醉中のふなれい聊まじ過る事も
あふく御心よさへらきび異日在下が催一の日に和睦してぬ
う師をふくめくして餘の朋あふくくその事の願ふち
りと懇ふいあふくむるあふく予も素より事をあふねむ
ともあふくもよきに計ひぬくと答へそのち式磨が會延ふ
いで別席において十返舎を専て其餘の事にあふ

と家人と集會して和睦の盃をめぐらして終に波風を納め
彼稗史通二卷に墨耳下小置らるを師より奥の八戸侯の御隠
居畔李君へ奉りしりこし復び右にことと入障りたるものあり
をわめいゝあり

○文化十甲戌年豊市せふ十返舎が著したる膝栗毛叢端と
よぶ一冊を錦森堂、永壽堂、文金堂らが梓行するところへ
右の巻中口給半丁まがくる

近頃雪磨なるもの此稗史通と題して新古稗史の作者
画工の出所事跡を記しつゝ紙聞たるもの悉く粗糲して
實に劣りて功なき稗史不通の書とらふるゝ予が膝栗
毛も八編かりて終るものと雪磨が書くものハ續編の出る
るをあらざるあるべし既ち當年續五編お至きむ其ところ
をききしり予め

また同年おたゞ人の撰る續膝栗毛五編冊下の巻末に書實
が世のどくとりありて十返舎が小傳を作りたる文の尾に
上小傳畧

或人稗史通と表題して新古稗史の作者画工の出所事跡
を撰寫するを聞きたるに一九生の輩に至りて甚く謬
誤あり依て是を誌し畢

西村、永壽堂識

おのき雪磨はらへく按るに續膝栗毛五編なるびみ同叢端
とくに幾ねりの前年癸酉の年草稿成りて適拙著此稗史
通を十返舎の披閱するにあり憤念成血なるをりあるを斯の

とききりもかたたるあふんされむ翌年、前條のふき風波
おろつてとかく有る後、いと眩しく成るもありく予はあふ
みそにうて粗人に名も知きたれむ右西編に記したるを
を削去すべき念もあつてやうつ

○一時十返舎予にりれ語ていふあふし一年越後遊歴のころ同國
みてとある民家に宿り屋上に釣くる瓢の年久しく煤びていと
雅あるもれ、ひじうむ主の翁は懇よむけるに翁は不用の物の
いく快く與へるもむ斜あふび悦びやうてさうを費足し路をぐ
も撫さふるは美しき光澤をいせむは増にむきうとびつ
吸筒るふ器に造らんと秘藏せしむるにとある所めて或人のよめ
古瓢を見て懇望するとかぎりあく何卒金壹歩まで賣与へ

よといひぬれども遂は諾はざりしがその夜の宿より着更純
風呂敷包にうて枕邊にちかくひきかけ置るに明日さめて
又き古瓢はりぐ地行んかひぬれ見ええぬありぬさてい人盗
まれしとわりへば腹たぐしを限もなく神あぬ身のその以前
み金一步を賣ぐしは悔しかりしとわらふた

○例の書画帖は大人の漆筆をえたるふ

陰陽のふととらといへども陽は柱ありて陰は柱あり
川柳点の柳はるは神子を見てあふくたたる宮ざらと
いへるは是陽のふととらありちきとつふい

みやうは乃大黒柱ありは乃大あなむちの神子の愛敬
○常に口吟する所のされ哥かつは發句のむつふを載す

恋　　まぐりや君にふらふ錫杖のかちよけして生れゑる身い

近恋　板塀のうちをむかり近きとむ釘のをれあるみもやうど

吉例
春典　賣とのにむぎさる花の枝ぐりをはくう下手ある梅は赤本

柳の
画よ　菟弱の玉柳とて地よとく枝を砂をももふひくもす祿

唐みく人參とくふとくもくや是大根のくもりありり

天の原あうきけ見えぬ目うへはかる霞や遠山の眉

りのむとるむときけは十七の鬼のむくといふさぬ琴の音

はとらばの酒はふひの玉もふたてくまでものむ跡引上戸

鈴なき
の聲　是も夕をたつとめとてふはふは茶せんをうて空也寺の僧

不奈女
の聲　烏羽玉の髪友の黒木に大原女のさうたる梅も花のうんざし

遊女
の聲　どあへもふものもちふとてい

狐巻の
画賛　生酔が三人ふれはさるがくはくははふぬてつぞうのらん

同　　狩人もうのれ狐のけりのあいたふらうとて何と志やうやぞ

十返舎門人

大原市女　享和より文化年間迄と云々

東寧舎一河　同年間ト云々

東牆亭一仏

五返舎半九

芝邊に居住して菓子を商ふをもく業とす初ハ和泉町四方家子仕へり今迄

深川六間堀子居住を男某ハ
星亭月磨が門人なりて画をよくい

金鈴舎一寶

傳馬町の住居建具を業といふ狂言をよくい或狂言集に銀鈴舎半宝といふ名見えり門人の名と思ふ

九返舎一八

後三亭春馬と改む傳末あり

半返舎一朱

愚舎一徳

唐土之傳別あり

天業

むめ散人

井上勝町

十字亭三九

大傳馬所居住せしが今行衛不知故人一九に隨身して三九ト云俗稱を系井鳳助と云下野国の産師一九没後未七人且其男にえて二代十返舎一九ト云戯名をゆるぐる○牛島長命寺中所在の碑ハ此一九を男に傳へるの門人らが建しものあるべし碑銘ふぶてれ人のいふにとありとおのふるも常とありていゑづるわねどつともある思ひれい月の夜と米の飯さとい色と酒あるなり

内損と腎虚とこれいねづつておの百年も生延しうへ
碑陰 十返舎一九

應需 憲齋書

黄亀 寛政七

景則 俳々道ト号し寛政八丙辰より

寶倉主 月

秋輔 寛政八号望月窓ト号す

鴨羽白二九

大傳馬笑日樂山人ト云 俗稱を承け馬笑と云ふ所國の馬師一九没後木も人其
甲に馬笑日樂山人ト云 我名をゆゑるの半島長命寺

中所立馬笑日樂山人ト云 俗稱を承け馬笑と云ふ所國の馬師一九没後木も人其

傀儡子 寛政十戊午

是も馬笑の別号なり書肆の好みつきて我心は染ぬと
無餘義作りし草双紙に此名を出せり

鶴成 日年 聞天舎

黄夢 日年 聞天舎

御手摺見 成平 寛政十

軒和輝 成平 寛政十

九年坊 壁前亭と号し同年

鉦色莊英

栄色亭 日年 聞天舎

栄色亭 日年 聞天舎

栄色亭 日年 聞天舎

橘香保留

蘭奢亭又奇南樓と号し住居堀留、三河屋煙草を
鬻ぐ産業と云々狂歌をよくて戯作も二三部之

南龍耳舎

寛政十二庚申

鈍々亭糸和樽

俗称武藏屋新六 小柳所住

神田新石所より住せり

名高き狂歌の判者あり

著述

御手遊達磨心學 三冊 岩戸屋校 福神金大帳 二冊

是戯作の初之 寛政十二庚申年 此外中本或ハ狂歌集あり

長閑春道

寛政十二

美明

紫色主

鶴聲

可笑門身享和元西

見越入道

福亭三笑

王亭子

關亭傳笑

築地御堂裏門前の邸に居住す本多侯の藩士なり俗稱
關平四郎山東京傳門人ト云々

著述

孝行娘妹脊仇討

六、豐廣、函
文化五、泉市

復讐言猿田々淵

六春箭
同上

新撰生姜市之娘

豐廣

運輝長者万燈

二、六、長
文化九

竹塚東子 享和元

武州足立郡竹塚のきき乃農まといふ文化十四五十五寅四年の内社
死去るべし

著作ハ

高慢 至無我人鼻心神冊宣政三辛亥年初作然山只終り京傳作とあり
自今の名ハ懸りの竹塚翁棟子とありて狂歌を詠

人物も京傳政の画姿とてハ高名をとりて多く賣人との板えの
手管なるを—— 其狂哥ハ

我ちうハ余の本あゝば青柳のいとまふあるふりを見あへ

トあり是ハ享和元年西迄の著述を見ん

雲飛脚二代羽衣 三冊 享和元年 三喜板 ところの戯文ハ三癸亥

敵討名譽一文字 三文化元甲子 豊廣画 敵討岩手ハ梅枝 前三 文化二丑 三喜

母敵現腹鼓 前三 文化二 討他力之焼継 前文化三寅 豊のいろハ 国安画 文化九

復讐言浮水亀脊 五 国長 文化四 滑稽奇談尾笑草 三 美丸 文化八

田樂 享和二戌

馬琴門人椒芽の号なり

一九 白銀基

竹馬 松亭

鬼武

初浅草姥ヶ池の邊に住居後新寺町に移りぬ墨川亭ア云
寛政中飯田町に居りや作名の傍に飯野山といふところト云

感和亭と号す 初号 俗称前野曼助或藩中のよし仕辞し市に
隠れ筆術に達し數千劔を長ス後、画を写山公羽は學と自語ふる

著述

自來也物語

読本 北馬画 十冊

大々行と文化四年大坂めて歌舞妓

狂言とてゝて與行とに古今の大當へ

三代目市川團藏自來也
の役大出来

是鬼武大人の一世の譽といふべし又義を夫の一節も残るる

豊介按は画入読本を歌舞妓に仕組ひ是を初とせよの或人云此自來也
物語、或人の著述とてを鬼武添削して自分の著述とせよといふ

天城錦

北馬画

函山領復讐言談

北馬画

舊觀帖

文化二年同三作
初三、三長善画
三編十返舎と合作

異療寐劇種

三冊

享和二年是草双紙の初作して十返舎一九画なり

慎道迷盡誌

同三多 春亭画 三冊

三國和漢蘭物語話

嗚呼蜚氣樓

三、山口板

敵討蝦名手躑躅

文化元年 三冊

返咲八里之仇討

文化二五

此作より感和亭ト改む

悟迷惑心之鬼武

二冊 文化二

執仇 奇説

響数千里虎尾峠

六冊

○四六手 京傳居士談

馬鹿山人作文化十四年同十五年の作らるべし卷中より役宅の事
あり文化十三年五月三吉原燈失火此年京傳九月死あり此

卷中尾上伊太八と山東京傳出く教訓あり

其餘は京傳已くしあつて

とてあききよむをかつて浅草の鬼武竹の塚東子といふもののこのお

あつちへ来て又あせやせ 鬼武去年故人とあるとあはれ没せし文化十四五年

のうちにあつた

○墨川亭に戯作者より諸先生の書画帖は牡丹のつゝを自ら画記

其賛に

福牡丹團十郎が株の紋に、ほろりなひ花の親玉

○ 小金厚丸

神田鍋町伊勢屋吉兵衛云紙同をより固の印なり

楓亭 享和三多

徳亭素秋 墨川亭云徳永

萩聲 享和三

三光 日

馬光仙 日

恒醉 文 日

穿山甲

薄川八重成

虚呂利 享和三

赤城山家女 文化元甲子

面德齋丈成

楚満人門人

待名齋一也

同門

赤城山人 文化二乙丑

同門

山旭亭

文化三丙寅

羞明まもひ云

俗性藤代屋太兵衛神田鍋町住居
家主として骨董舗あり今なき

負壽亭 日

蘭衣

櫻 鯛助

山東京山 文化四丁卯年

京橋銀座町一丁目東側亡兄京傳が旧宅に居住し初、京橋
太刀賣子住し京傳より相傳の製薬を習ひ又印を彫りて産
業とし山岩瀬氏名に百樹字鐵梅近頃剃髪して涼仙とい
初の名を利一郎といふ鐵筆堂又方半居士の号あり初、書を
覽山といふ書画をよくし儒道に深い原は篠山侯に仕ふ後
辞して京橋に居住し是より戯作の道に入りて兄京傳より
順ひて其名を四万といふ男京水の幼きより武清が門弟なり

画をよくす菩提所回向院に建る墓碑の銘を乞ふとて姓氏
を詳に尋ぐ天保九戊戌年翁が齡既七十歳六月晦日剃髪
年賀の書画會を催す

剃髪辭

人も四十といひ兼好も六十八の歳乃一豆を数へりいりかよ
めて〜といふりいざりやつぐむと七十の春よあひてめて
らめ〜とて喜びぬきどあめを一つありえたる事もなけ
きづも〜は見えたるむく犬のおい〜とあり此水無月の中乃
ちも我がうまれたる見世に數まつる人もいふべ詩の歌のと
長生の賀盃をもめ〜とてきよ多病つゝを辞す後に士商
のひあそひは瘦浪人の桃の木あそびいづらあるものえをとるべき

さきば古稀を壽く盃をらくと名よぶ茶碗あめつ〜ひら
かへ金のにえ音をすとも松風と夜い口口を薄茶ふ
ささるの樂〜こをともするをりしも庭は咲〜けの花を

〜風さるお〜なる坊主ありの清ふあるが〜やゆ〜我も又
百歳よ〜ぢたふぬまではおい〜とて世間の申わけは
か〜らを丸めむつ〜きさるあをた〜まべ心た〜のう〜壽お
の〜長袖の老をや〜あ〜んと此句の樂天を師〜とてさる
あ〜さ〜めけるさておりあは夏の行水あ〜は〜の涼きあり
秋の月見は團子の影法師もおり〜あ〜んと友人は語〜れば
張三李四のども坊主も〜い〜に剃髪と年賀とをこき
あせて一世一代ま〜せん書画會をりあり〜め〜つ〜も力を
そ〜ん〜玉〜もき心〜し〜旧友の〜あ〜まらせ草庵を

せまきゆゑ人の家をかりたつ^き所の所と日限とい別子とある一つ
諸君の光駕を柗まきつてほぐぐぶやをあそびたまひ
しり

十徳成けふ羽衣や柗れせみ

天保九年水無月朔日採筆

七十野史

山東京山

東里山人

文化四年

麻布三軒^軒家に住居

公の典事たり俗称を細川浪次郎

と号し九陽亭と号し又鼻山人といふ印

め印 俗に

京傳鼻といふ或人山東京傳が門人ありといふ

千代松武

文化五年

松下井三和

琴川

馬琴門人

市二三

姥尉助

東西庵南北

文化五

一書：朝倉力藏大和町とあり

芝金杉町に住せり 原も吾妻橋手前竹町に居住し 割刷
唄より朝倉藤八といへるより 画工春之助 後 春好物語りぬ 黒川
亭の話あり 文政十丁亥年没せりと云々

興風亭拾井

文化六己巳

一溪庵主

本野素人

益亭三友

素速齋

怪談四更鐘

文化二丑刻行

錦久留丸

日

文化七午年一亭五蘭ト改名

槁本德瓶

文化七庚午

硯亭墨山

川閣樓

萬歲庵龜人

石亭年序

六樹園

文化七

吳岸島中村梅太郎内

俗称石川五郎兵衛

吳岸嶋東添町小住居石川氏名ハ雅望字ハ子相まゝ
五老齋と号ハ四方赤良門人なりて初号宿屋飯盛ト云文政
十一年真顔と共に京都ハ宗匠号免許ありて狂哥の判者
なり文政十一年九月宗匠号披露柳むす大のにて興行を
初め小傳馬町三丁目に住ハ百姓宿の旅籠屋之故ハ宿屋飯もりと
戲名せり故ありて四ッ谷内藤新宿依ハ宿屋横断ト云ハ將宅
と云ハ父ハ石川豊信ト云テ画工之男あり石川清澄ト云父ハ次で
狂哥判者なり

文政十三庚寅年壬三月二十四日病歿于時七十八才浅草
黒船町地中正覺寺に葬せり

君諱雅望字子相姓石川氏號六樹園又号五老齋
名蛾術江戸人君天資聰敏才藻優麗學莫所不
窺尤覃思和歌格調俊邁詞彩粲爛一時專門名
家皆出於其下風四方贄謁乞業者不可勝數海
內推之爲一世宗盟焉其所著之書數十種正梓
布世如源注餘滴雅言集覽所尤致思也足以觀
其洽聞博覽之學華鉞超倫之文矣文政庚寅閏
三月二十四日羅病而卒享年七十八。葬。於淺草正
覺寺子院哲相院謚曰六樹園院臺譽五老居士
京師縉紳之家嘗覽君之著書感嘆不措授以
宗匠之号叙之法眼沒之後宣文始到于東都

識者憾焉嗣子清澄謹乞余文勒石建之墓門余与君
相知者尤久矣義不可辭也系以銘々曰

千嗟乎死而朽者形骸不可漸滅者名一世執文騷
之柄千載享法眼之榮淺草山々靜地靜以固其塋

孝子石川清澄謹建

文政十三年庚寅三月二十四日

吉田勇雄識并書

著述

飛騨匠物語五北斎畫

近江縣物語五重政

通俗排悶錄

正二 吳泉畫
直校

ちみのもろの物語

都のちみ

床覺のちみ

源注餘滴

雅言集覽

梅暮里谷我

薨年ト号ト

久留里侯の藩

本所埋堀、住居
大目付役と云

俗称反町與左衛門

初三郎助と云

著述

金花夕映

五、北高
文化

山莊太天

五、北高

傾城買二筋道

同二編 廓之癖

同三編 宵の程

契情 夢之盜汗

享和元

同後編 妓情返夢解

契情 買言告鳥

同二編 廓之櫻

白狐通

甲子夜話

貞操小笹雪

北高
文化五

江戸乳質浪花梅

二、英泉
文化五

傍 紫 樓 主 人



柳亭種彦

文化八年未

淺草堀田原

始下谷
組やに

俗称高屋彦四郎として食禄貳百石知行

せし公藩之本氏を横手といひ原ハ甲州の士之姓ハ源名ハ知久

愛雀軒と号し文政五年の春自ら足薪公羽とあづく初

門ヲ入て漢画ヲ學ト云々俳諧の古調を好み又近年流行の川

柳ガ俳風を嗜み秀吟多し又傍紫樓乃号あるハ田舎漁氏

大ニ世ニ行き戯水ハ如斯あるハ于時天保十三壬寅年七月

十八日卒去りぬ行年六十七赤坂一ツ木平河山浄土寺

葬ス法号

芳寛院殿勇譽心禪居士

辞世

ちるも終は定まる秋を柳の耶

源氏のくうせぬひもお月さ秋ありとありて

我と秋六十帖を名残のち

柳亭種彦と戯名せしハ如きころ疝氣強くとみ角に腹

ち怒りしハ尊父の教訓して一句をほくちり

風天窓をくく睡ふ柳のかト是とち父の訓をちり怒

事を慎みらるト云々又天明風の狂歌を嗜み狂名を柳風成と呼び

後臥て心種俊と云々是ハ和歌人の心を種とてと云々

て然せしハ其頃下谷辺ニ三彦と唱る者ありてち人不知種彦

先生も其一人として初号の柳風成の文字をとり柳亭ト呼俗名

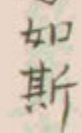
を彦四郎といふ多きをりて戯名を付しと云々又戯作の

三ッ彦の印ハ先生壮年の頃ハ戯場を好み殊ハ故人坂東秀佳

二代目三津五郎
余の津五郎の親

三津五郎其終を見るが如くある故茶番連中にて三ッ彦ともいひける

をりて



如斯印。へ一時先生の話に戯作者も俳優傾城子齊く

壁をちやいせいは顔の美しとして張も意氣地もなくす髪乃

飾り衣裳の綺羅ふれば客つゞ又戯子も男つぎよく藝も

未熟なればともども衣裳の綺羅と諸人愛敬を専らせき

れば見物よりこぼれ人かゝて艮員の客ふ此理は似く戯作

者と全体が上手みてよく紹るといへどと拙き画工もあがせ悪き

彫工の手より外見も悪しきを栄えりて賣に當る

事ひくふゆゑにされど後上手人はいそりりの未熟なる

初より其器あつてべし。あつて一つの斬りむう一人とよむべし

俳優元祖中村仲藏

秀鶴後
中山十郎

初は藝道も未熟めて俗なをい

め顔を赤く隈どり藏衣裳乃素袍めて並大名より出が粘

強き麻の素袍あつて二日三日も着るにのゝ氣おちて皺多く

又苦き銭樂を入り後外同位の役者八人手このみりけり

置るもやぶ其終衣裳棚へあげ置る又明日其場も未だむ

前の素袍を着て出る故に見苦しかりし秀鶴もこの衣裳

を人手にくげ自ら其素袍を水のししてよくる毎日毎日の

どくす丁寧みあけむ翌日着て舞臺へ出て列坐の戯子と

立ちあがり時も一際勝として立派にいふも上手にしく見之看

官の目もとたちれを戯場中の役人も目をつけ彼ハト器量

ある者あり後の狂言あつての役あつてんと其役をさせて誅ん

と衆の中より推し役割を附する其案に違ひぬその役をも
相應に勤めれば次第くみよに役を勤め位も昇り終る名人と
なり今其譽を残せり天下に名を轟くに者い低き助より其
器量に衆よりえりて戲作も此秀鶴が心懸りて常は心を用ひ
一句一章たりととおろろに書みきりものなり丁寧反復して
ほろより筋の通るやうに書くれば画工も工風をあらわ
るべきかと予て物語られき此事は墨川其下も嘶きつゝ云々
又常に用ふる所の硯は茄子の形たるあり其蓋に自詠の狂歌
を彫らせり其歌

名人はあましく 茄子とたどるふとがくはるさゝいさぬれさうらな

二世

劇神仙壽阿彌

江戸伊勢町の出生御菓子所用俗称真志屋五郎作
後子二代目宝田寿來の名を嗣難劇作者と成る

博識滑稽の人なり和書歌学は長じ専ら歌書の講説をして
門人数多あり又諸侯方より出て天明寛政の頃の洒落本の俗譚
卑言の高貴の君の知り給ふ事をも勿躰らく講釈して諸人の顔を
鮮む時人なり戲作も少あり嘉永元年戊申八月廿九日没行年
八十歳法名東陽院壽阿弥陀佛曇喬和尚 寺は傳通院地中
松林院
頓死して辞世はな
故人坂東三津五郎所作事の半田稻荷朝妻殿と云ふ
寿阿弥の作なり
豊島町なる豊芥子へ去年の大晦日と當甲の年始は短冊二むら
贈りたり

七十九の
やうのふ

あすは是れ八十のちまこの門は松

八十はあまの
この始め

今朝は是れ八十のちまこの門は松

八月十五夜は癩氣取つたうらめぬる覺えり翌日の
昼八時頃までには快く成りしむ

柴船庵一雙

不乾齋雨聲

紀ノ十子

高井蘭山

芝伊皿子御組屋敷與力高井鐵之助の父俗稱を文左衛門と云名の
伴寛字の思明といへり

著述ハ男女の教訓を告げ有益の物多ク又讀本而已を編述
一草双紙合卷物の筆作たるを見れば

三國妖婦傳

合十五 北馬
享和三十八 文化三

孝子嫩物語

五 北馬

那智の白糸

五

右月断

星月夜顯晦録

十日
文化六

應仁記

二十
大本

英泉画

水滸傳

二編

北馬

小枝繁

焰硝藏

四谷忍原横断

付馬町三丁目
よこ丁

住居

始い青山
エンシヤウクラ

絳山と号し又歌謠陳人

といふ

水府君御主殿付俗称露木七郎次といふ撃手劔子張

ト筆子安何もの年身内りーッヤ

著作

東嫩錦

五北奇画

柳之絲

五北馬

玉落穂

十北奇
文化三

催馬樂奇談

六北馬

小栗外傳

三編共十五

北奇

古能花草紙

四北岱

景清外傳

国直

橋供養

国直

玉廻露

五

英泉

鶴屋南北

本所亀戸小住居也

雜劇史ありて其名高し初勝兵藏といふ南北乃名ハ俳優の

諱名鶴屋南北いんかくが名跡を継ぎ四代たり此南北を舞臺へ出勤

ふし狂言の作のて業とせり三戲場を勤る事五十餘年文政

十二己丑年十二月廿七日没ぬ時子齡七十五也ト云々本所押上

長養山春慶寺に葬る法号

一心院法念日遍

狂言作の外は草双紙の戯述あり

或人曰南北葬式ハ四ッ谷の磨丸太まで差ふふひめて寺に至り野

邊送りの人々ハ地内ハ葎簀のひけ茶屋を補理いっさへる爰は門弟

等赤前曲をうけ銘々小團子を竹の皮子包み是なり

『まてのうとまろこまんずい寂光門松後万歳』

と云々一冊?

中本にて
紙頁五十出せし

其小冊子も藏り
此書ハ南北存生

著述せし由又日以遺言いひい己狂言を作り葬禮の場を失ふこと度く
あり然れども皆さしにひの葬禮ゆゑ我死去いゝあはさしにひひめて
寺へ遣はるべしと常言はるより又南北一周忌の節『いゝゝのつゝ祓
は戯文せし』拙出板せしは南北孫鶴屋孫太郎が著述ト云く

男は俳優坂東鶴十郎といひい舞臺を辞して深川

仲町に居住し直江屋重兵衛

子供屋を業とし又狂言作者をもせし
が天保二卯年身はつゝぬト云く

本所押上春慶寺に建る所の墓碑の表

一心院法念日遍

鶴公羽南北家

鶴屋南北初の名を勝俵藏故ありて鶴屋氏を犯しぬ
生れつき滑稽線好く人を笑はせしをいつゝ終る
歌舞妓の作者となりて一世のあひだ大名をあはれを安永
四年まで免て堺町へ出勤し歌舞妓作者の中にも拔群の

才ありて十種曲あはれありをうけて人のこころにあはれんことを

要とせされどあはれむことをきひて文盲ありと言ひし

自らなるものなり文政十二年己丑霜月二十七日年七十五才

にて身まかりぬ三の戯場の作者なる五十四年ぬ死失せ

あんむるさね子弟等をよびていひけらく我は一大事因縁

あり枕がみあるくぢぢのうちにありあはれん後むきく

見よわたりふすぢぢぢくぢぢくぢぢくぢぢくの人々よみ見て

親族

よくこれを守るべしとて目を眠りぬきてのちあはれくらくち

やうて墓をむききて見れはうらぎに死出の門松後の萬歳と

かきそよよみ見きむ萬歳の唱歌を葬送よりして正卒の

やうにちぢくぢくあり皆くあはれむむきく最後の滑稽

あるべきとてみそをうけやうひさう思其後むつき三十日押
上ある春慶寺ゆゑとてむうの工にうらるとも但南北は
いふ名のれ一代あつたなりはて人によづりあへば
となり

右ハ六樹園が作文自筆をりて是を記し定世祥ふを刻
文政十三庚寅年閏三月建之 直江重兵衛 勝田亀岳
鶴屋孫太郎と連名

草双紙乃著述ハ男重兵衛又ハ孫太郎が綴るを南北
の名あり刊行せしと云々

墨川亭云

文化の初高砂町の姥尉輔といへる戯名にて著しと云ふ

松緑高砂話と云冊子けり是南北が作あると或ハ外人の
作ともいふ

孫も勝田亀岳と云むれ幼より画をよくせ向島割烹
家武藏屋権三が子なりや香蝶樓物語りぬ

玉亭光城

書肆西村

陽齋南山

麟馬亭三千歲

春月薄雪櫻

三卷文化九
香亭画

醉月梅笑

山月庵古柳

泉橋油屋某

當山傳光

口八下中本 餅市と一

軒坐畫所

神屋蓬洲

小石川に住せり後花洛に移り住き由自画にみづき書し
彫刻をとりとていへり著述あり

天縁奇過 三冊 口八丁 中本 猶あるべし

千歳亭松武

山口屋藤兵衛 馬喰町二丁目 錦耕堂が隠居あり後、松壽亭松竹と
いふ天保六乙未年五月没ぬ 七十余才と云ふ著述あり

時鳥相宿嘶 文化年中 国貞画

川上老人

讀本、田村物語 五卷 北馬画

樂々庵桃英

讀本、阿陸幸助戀夢盤 三卷 北奇画

萬亭叟馬

讀本、由利若野居鷹 五卷 北奇画

二代目
福内鬼外

讀本、泉親衛物語 五卷 紅翠齋 七十 浪花書賈
秋田屋梓でん又土州侯御内、福内庵鬼外といふ人
い著述の事いづゝで只俳諧の道を好む人とある或人云

良々軒畚水

讀本、十嘉恵利花 五卷 北岱画

熟火睡亭

讀本、獨より新語若葉榮 五卷 長喜画

川關樓

讀本、加々見山列女切 疑らくい亭和三刊行せり川関惟光
ふんといふ

千鶴亭萬亀

讀本、久智之伊志婦美 三卷

硯亭墨山

千羽鳥蹊暝 三卷 文化七刊行 月六呂画

赤城山人

松井武次郎物語 三卷 美九画 時三十四年

昇亭岐山

檐五月雨 三卷 国芳画

樂亭山壽

松春色出世景清 三卷 文化十二年刊行 西宮新六板 国直画

一筆庵可候 画名 溪齋 英泉

嘉永元年 戊申七月廿三日行年五十八歳 没 法名 溪齋 英泉居士

辞世

色づる五色の雲より法れ道心より限よりも那

西川光信

通神百夜車 二冊 国安画 文政七甲申 鶴斎板

新川山人

礫川山人

假名手本三度能清書

同年 伊東板
春草画

龜友山人

東民

浮世三十二相

文政八酉 岩戸屋板

春川五七

増補口八丁

二冊

神屋蓬洲が筆に繼ぐ
其夫人の著述

希婦埜里人

奥州白石の人

黄金花作陸奥

四冊 貞房 文政九丙戌
国直画

有竹軒

信陽の人

紙子頭巾角助話

律秋庵

指角力手管業物

三冊
義九画

文政九戌

南嶺

小石川の住

東掇様連理巢尺八

長喜画

岩戸板

長亭

小傳馬町住時給とて業とて初号一亭又三亭
といふ狂哥を嗜みたり

雪磨

墨川亭号

高田侯藩中俗称田中善三郎戲作ハ柳亭大人の著述ニ似
たり初歌六呂門に入る画を好み或時曲亭七十の賀延きて
予初て面會し其節扇面を乞ひて持参被致墨香亭
贈りて其扇面

黙々漁隱

護州侯藩 木村某

戲場頭微鏡

全四冊

桃山人

北國笑談

美談 中本 六冊

文政十亥同土子酉年ニ刊行也

花街櫻山人

花山亭笑馬

尾州侯御家臣にて名古屋在住

青樓玉語言一卷

文政五刊行

崑崙茂世

越後國

橘氏なり画をよくす

北越奇談

六卷

柳亭校正す

紫行堂

奥州の人著述

高野蝶三月貞金

三卷 永壽堂

橋本徳瓶校合

緑亭可山

或侯の主食の人となりいへり病て駝骨之著述数部あり云々

鶯蛙樓

青樓通談遊子語言

二冊 小泉画

文政三辰年刊行

日本橋吉瓶跋あり

玄光亭金墨

湯嶋切通鱗松院門前骨董舗を開き、後何地へ移り、忽ち池の端仲町の筆工文孝堂が主管となり、俗姓金次郎といふより――

月光亭笑壽

畫工勝川春好の妻あり

文鶯亭春馬

落語をいふ人の由

狂戯別傳

風流問答

中本一冊 國安画

文政五壬午年丸文板

文尚堂虎圖

神田松枝町

新慶

書肆丸屋文右衛門

初名□□文壽堂と号す

麻川眉山

武州八王子八日町の人随風亭又松甫奇と号す

道草日記腕枕

二冊 文政四年 国安 丸文

孝貞六助誓勇働

香亭 合巻 国丸画 森次

文尚堂東園

向榮樓欣堂

神田白壁町めて質屋ありしが後終子産業を破りて戯作者となり欣堂間人又本蝶山人と別号を其後雜劇史とありて寶田壽助とらふ天保七申冬病て卒す

茗溪庵

柳蔭桂川水

三冊 国直画 柳亭校

文政五壬午刊行

岩戸

玉虹樓一泉

或咬江作

本所御旅所の妓樓と和泉屋祐四郎と云故馬馬門人ト云

工風癡會話

二冊 泉画

生鯖船

一冊 柳亭問答 柳川画 落ふち

夷福亭宮守

本材木町一丁目書肆西宮新六ト云

錦繪淨瑠璃本義太丈碁古本門屋之文政己丑の火災はかり家衰へ其株を人に譲り今水谷町西宮久兵衛と改名

町役を預り傍う冊子の傭書をするを戯名をさへ内々呼ぬ夷
福山人と号す或は福亭禄馬と云ふも楽亭西馬ともいふ一時
ハ俳優瀬川路考の名を假り或時も岩井紫雲の名も假て
著述す狂哥を嗜めり

著述

瀧亭鯉丈

後ニ駒形町河岸通るニ住居す

浅草傳法院門前に住居す

一男あり
勇次郎ト云

初知ハ下谷廣徳寺門

前稻荷町にて櫛を商ふを以て業とし新内節の三味線に

名人あり名を

八藏といふ女あり其ハ一中節をよくし其師

として浅草駒形堂近邊にあり都一美世と云鯉丈滑稽

の裨史の事を著す

花暦八笑人

初編二三追加
文政四乙亥泉合刻

大山道中栗毛駿馬

初二三

滑稽和合人

六牛嶋土産

伊勢道中三方廣人

六

其外人門万事噓計

三馬作
後編

串戯二日酔

一九作
後編

猶あり

岡山鳥

名長盈字ハ哲甫號竹之戸又丹前舎ト云

神田四軒町近藤侯に仕ふ俗称鳥岡芳右衛門といへり

舊名を
権六ト云

一ふび浪人として駒込大番町に住し大衛の卒とあり後又舊主に

帰参り初め曲亭公羽の門入節亭琴驢といへる狂歌
嗜みまゝ書をよみて備書するもの多し故式亭と
交り深くして門弟のどし

驛路春鈴菜譚

二、文化四卯
豊廣、宗理

廿三夜待

三、文化土戌
国貞、貞繁、堺国

水中魚論丘釣話

善光寺詣

二、貞房
文政四
堺国

如月初午

三、英泉、堺国
文政七

楊弓一面大當利

江戸名所花暦

四冊 文政十年刊行
雪旦画 守不足、守板

竿齋道人序

五柳亭徳升

本所法恩寺前町に住せし後本石町一丁目に移り住み家
兄らりて初め鎌倉河岸にて紙類を彌ぎ活業とし豊島
屋甚藏といへりが後衰て貸本屋をりて業としり故に人呼
ぶ本徳といへり文政五年の頃軍書讀典山が門人となり舌耕
今本家の客より初め俳優市川三升の名をかりて著述をし徳升乃
名を知る者少し文政十一年春名弘めの會を催し近頃御納屋
あて書史となりて戯作道を廢す

晋米齋玉粒

馬喰所四丁目に住す後大傳馬所新道に移る

姓を藍庭名に林信号を藍亭又米齋ともいへり備書を
業としてその名頗る知られ文政七申十一月剃髪す此とき
六樹園狂歌を贈りぬ

同八年芝全交がいささかの親族より名を乞受る
二世司馬全文と改名同十亥年五月二日卒也男あり
前豊國門人あり國景といへり

無佛坊元越

小綱所住居

元越と呼て鍼醫之幽月庵を號し同所子田原船積と

いへり狂歌師なり其側よりなりて狂歌せりあんと

伊東與兵衛りのびとなり著述

田舎鶯

二冊春亭画
伊東校

附糸踊子新書

五冊美丸画
同年校
二部より十返
舎校正を加ふ

岳亭丘山

大傳馬所住居初に青山邊に在ると云ふ

俗稱を芥吉といへり今浪花に登りて帰らば原戲名を堀川
太郎春信といへり中頃岳亭定岡と呼ぶ狂歌城窓村武に
学ぶ画に茅場町なる堤秋栄に學び中頃北溪の門に入り
又北齋爲一に隨ふ著述

狂哥畸人傳

水滸太平記 英泉

忠孝

永口

水川
三、自画 伊東
文政八

葛葉山人正二

男を篠田順藏と云

戯場の狂言作者あり初、篠田金治といひ後二代目並木五瓶と改名し程ありて没しぬ寺々下谷池の端正覺院 戒名

並木舎葛葉居士

文政二己卯年七月七日卒

又梅柳山木母寺境内に

辞世の碑あり

二代目並木五瓶

秋や今清しや桐の一葉ある

葛葉山人

菩提所并梅着地内ニヶ所の碑ハ狂歌堂真顔山東京山歌川豊國三大人世話人とありし勸化帳へ各、狂文を書して江戸中へ配り無程成就せしと云々

花笠立文京

初ハ柴井町住居書を鬻ぐ活業とせり中頃日暮より室町に住み雜劇演史となり鶴屋南北が門に入りて花笠魯介と云住吉町に居り一年俳優尾上梅幸と浪花子登り暫、彼地より止りて代作屋大作と名号もちの文作の代作をとりて世上に披露しその業をとて利とせりといふ自らの話あり後又江戸に帰還しが聊障きるをほうて戯場を辞し去年の秋八月に代作のて銭世に弘めんとて引れつゝ所々へ配り又書画舎を催し花笠魯介を改て代作舎大作と改名し冊子の著述ハ、梅幸が名を假といふぬ儒家東條琴臺改左衛門の兄めて醫師の悻

ありと云々

瀬川如皐

雜劇演史之狂言堂と号し又新濱村屋といふ瀬川路考
の親族なりといふ近頃戲場を辞す

著述

總猿僭語

十英泉

木曾義仲勲臣録

初五二五英泉

七小町

中本
国通

むぎ古雅志

隨筆二冊

白頭丸柳漁

狂言作者濱村助が事と云著述の冊子と柳漁庵と名
をふせし事も有り又後の楚満人門人驛亭駒人と名つ
或ハ戲子瀬川路考が名をうつ著述とも聞えぬ

著述

松嶋半二

狂言作者なり俳優坂東秀佳

二代目が
三津五郎

名を假りて著作

すといふ

寶田千町

中川金兵衛と云々

二世

鳥亭馬馬

墨川亭話

深川古石場に住居し其家武相甲豆駿房総の七國を眺望するをりて七國樓と号し與力山崎助左衛門の男同苗嘗次郎と稱し狂哥を嗜て伯樂舎に就て松壽樓永年といふ後六樹園に隨ひ一号を蓬萊山人といひ性質角觥を好て吉田追風と就て行事の些末を習へ妻を立川梅子と云和哥を詠む友に故馬馬翁ハ文々舎の家兄松風臺停々と友垣の交り深りけり馬馬没後其名を預り置る

が文政十三年今の馬馬が麟馬寶馬等と計りて松風臺にて二代立川馬馬が名跡を継ぬりとも談洲樓の号ハ翁がいらるともゆりて麟馬を請けぎぬとぞ前にもいへるべく今年天保六乙未卯月廿一日故馬馬翁が十三回忌追福の集會ありて墨川亭も其席に列じ由らるお春駒の題めて人々の發句狂歌代需て摺本として人々を送りおの摺物豊子藏

野や廣きかやのうちある女郎花風を寐て更けまさおきく見ほ何事も茶にしてふせ世の中此人の噂ハ口形——乃こそ那

著述

茶番一夜附文政六

懷中鏡山閑

六、國貞、岩戸、文政十二年

忠前孝記六、國貞、文政十一

角力水滸傳

国安、森治
文政十三

荊萱桑門筑紫寫繪

六、国貞
文政十四

芝吉

戲場稿本當現建

六、国貞
文政十四

活金剛傳

前後四冊
山口

妖狐天網寫

六、国貞
天保三
泉市

俳優畸人傳

前後四冊

西顔忍夜櫻

八、国安
天保四
国房

大和染對之振袖

八、国貞
天保八
森治

返咲難波裏梅

中、国貞
天保五

芝居細見三葉草

花兄魁綴冊

爲永春水

辨慶橋子住居所中頃本所牛島又下谷池之端に住す初々
軍書讀めて爲永正輔と称す名、貞高又書實となす青林
堂越前屋長次郎といひて橋所或は通油所、居きり戯名哉
初ハ二世振鷺亭といひ中頃故人南拙笑楚満人の女を乞て
二代楚満人の名を冒忽後障きるるは、其名を返し
文政二子年春水と改む号を狂訓亭といひ近頃書實
の業を廢る再び軍書讀とあり狂訓亭金龍
此節浅草寺内
住、金龍上人云
と呼あり浅草寺中及所々の席に出る古耕を著述、他の
偽作もの有り、又人情本と唱へ中本の
著述大に世に流行次第に其名を發す天保十三壬寅年右

中本類不殘絶板に相成り出板御停止被仰付此節人情本元祖為永と誌せし故御咎に相成

著述

梅園 著述讀本

春宵奇談園三梅

文政四年刊行
五卷 英泉画

花影小蝶夢

中本
柳川画

木村梅年 名ハ忠貞

太田道灌雄飛録

大本六冊 春亭、美凡両子画

其後太田道

灌の題号をいひつゝ改むと云々

二世

戀川春町

下谷坂本町の住居を聞り文壽堂書房ありし頃話に貴家の剃髪して隱居するといふ又醫師ありともいへど何と云ふ是とせんと云ふ故春町が門人めく恋川幸町といひせり自らいへり云々

玉樓花紫

北廓玉屋山三郎抱の妓之紋所三ツ兔ふく其形  斯の如く
是を冊子の表紙の模様と用ゆ 著述

宿縁奇遇梓物語

文政中刊行 英泉画

龍威堂梓あり

ふ々其客が戯れ代作せしと或人いつてふも遊女乃著述といふが珍うあといふ其名を挙るあり

江南亭唐立

濱町安藤侯の邸より俗称中田慶治といふ早々街市に住る、幼より狂歌を好む故十返舎に随て愚舎一徳といふり

一時ハ田沼侯邸に居るといへり近頃戯作を廢て著述

を見ぬ初作を文政七年刊行す

誂染紫色揚

四冊 国安画

鶴喜梓

忍岡常丸

下谷上野町常陸屋甚兵衛といふ呉服物を商ふ

著述

金成木後看与蘇和歌

文政七甲申印行、
国直画、榮久堂板

後編を出せり

故一九が好みの浴衣地を年毎の例として新形を染出せりと云い

林屋林泉

今所林町に住居す初ノ林屋正藏と呼び中比二世鹿野武左衛門と改名元禄年間の名落話怪談嘶の之祖あり名人なり頗文雅なり書もせりなりにめりてハ狂詠又淨瑠璃義を又の曲をうす天保六乙未正月剃髪して林泉と改めし俗とあり舊名林屋正藏と改名天保十三壬寅二月没しぬと云々

著述

先開而三升の世界

三、文政七申 国直

帶屋於蝶三世談

六、文政八酉 国貞 四子

敵討鷄權兵衛

六、重政画、種彦校 文政十二丑

怪談春雛鳥

初二天保十、貞房 三四、内三、国貞画

大東陳人

著述

松風村雨物語

六、文政四 国直画

顯名録金石譚

何と云讀本

詠月堂甲太

浪換様尾花双紙

中本 英泉画

三升亭金鯉

菜六陳人

文狂亭綾丸

桐之一葉

三、文政十丁亥刻成
吳泉画

文亭綾經

横山町一丁目大坂屋又兵衛といひ砂糖を賣りて業とす

全亭正直

麻布

住と薬品を商ふと業とせり六樹園側の狂歌師に

著述

金鈴橘双紙

五卷讀本
吳泉画

嫩髪蛇物語

五卷 吳泉画

狂歌今昔物語

二、文政十丁亥年發行

西來居未佛

狂歌師めと初号瓢箪十園一寸法師と云 著述

忠臣藏合鏡

文政十二己丑發行 馬馬校を加ふ

圓屋賀久子

是ハ婦人の作者のふり沙汰せしむる実ハ偽名なり爲永春水が作を
珍らしき人々己が名を匿しし斯く稱さるなり

乾坤坊良齋

梅澤勘平が男なり

軍書讀より初ノ菅良助といつ落話もよく今冬貸
本を業とす

著述

黒雲太郎雨夜譚

初編二編

門人

文車

古耕師

二世菅良助

三世菅良助

松亭金水

小傳馬町三丁目北新道に住す初ハ大和町に住居して手跡の
師より俗稱を中村源八といひ中頃より浅草寺中に在り
常に備書をりて産書とをり

著述

皇國性質

二冊隨筆群玉堂刊行其餘中本合巻なり

花扇真三ツ丸

向島住

雄雌赤友録

天保三辰刊行

国安画

園壽甘泉合刻

墨川亭門人

墨春亭梅曆

又春更屋と呼ぶ

日本橋数寄屋町に住居せり俗称小山平七初平六神宝方
御用を勤む別号を梅園といひ梅舎春鳥とも云つ常に
戯作をり樂とせり和漢の古書雜書等多く所藏す

著述

娘曾我振袖日記

八、天保三辰
泉晃画

野丈鶯訛之投節

四、天保四
泉晃

半開花繪扇

四、天保五
泉晃

花衣芳野葛織

四、同上
同上

銀金貝蝶之對鉤

四、天保六
月

柳眉春朝妻

四、天保五
景松画

朧染浮名之色衣

四、貞秀画
天保六

風亭馬流

姫路紫藤花鳥

天保五甲午刊行
景松画

紅英堂梓

一亭万丸

著明堂自好

祇園守二代家土産

中平天保五午年
国直画

狂蝶亭文丸

千代春道

原ハ岩倉町ニ居て後ニ馬喰町に移り筆工橋本徳瓶
義太丈節の稽古本の寫本を書くに十八歳の頃かゝる
能熟しゝるものごとを文政八回年病て没せしと云々

著述

復讐縁小車

五文化五ハ辛
春亭画

三亭春馬

淺草山谷町住居

初新吉原京町一丁目の妓樓大文

字屋市兵衛

養子とて
後継家と云ふ

といふ今業を替へ質商賣と稱す狂名

浅加保茶浦成と云淺草庵春村も就く狂歌をよくす

又故十返舎一九の門人めて九返舎一八といひるが後八文字

屋自笑又十返舎一九と改名して二代目を相續け

松竹梅
壺前裁

多氣氣競

中本天保十當り
国貞画 初三、貳三、参三

林直丁主人

千本櫻後日仇討

四卷天保七甲刊行貞虎画 角久梓
雪平呂大人序文

三甫錦二

有智治春七種

四天保十一年芳政画東里山人校合山口板

松下樓麓谷

藻塩草須广書替

合卷四天保十一子刊行
貞秀画つゝ喜

為永春雅

狂言亭と号す話家とてあゝ馬といひし由

春色雪の梅

天保九、同十 貞秀画春水関氏大島屋板
初二、三四

春色初日の出

天保十一 英泉画
初三貳三参三

為永春江

狂文亭と号す飯田町坂下

六玉川

中三冊天保十一庚子四月發行 英一画

為永春曉

狂詠舎と号し青山久保町
松平志广守様御家表 由喜恵ト云々

為永春路

狂遊亭と号す

為永春蝶 狂花亭と号す尾州一の宮に在り

一文舎柳水 北廓中

曲山人 三文舎と号す

墨田川邊の住居よりや墨濱漁父と名をくふ故人なるは

娘太平記操早引 初三冊二上の巻遺稿と見ゆ
中の巻より松亭金水補へり

通用亭徳成

敵鯉差味業物 四国芳門口口画
天保八回

寶亭文雪

緑亭文橋

佐野渡怨敵懸橋 六頁秀画
つる喜
天保十亥

行亭行成

谷廼初音中三冊

為永春友

笑訓亭

木挽町二丁目

為永春里

旭亭淹昇

初日廼出四編春

為永春英

麻布龍土

杏亭壽山

忠孝譽石碑

四 天保十三寅刊行

芳虎画

笑門松和合壽

四 同年 負秀画

何より松原堂刊行

松竹園秀山

金澤万八笑増談

四 天保十三寅

仙雀堂梓

玉蘭

勝軍源氏之高名

天保十三寅

貞秀画

つる喜

春頌齋應賀

又號萬亭

俗稱服部秀三郎

地廻武志

三天保十四壬寅發行と梓刻年書房鈴師の名あり画
英泉文溪堂之稿本ハ幸且夏畢りたる序文中に見ゆ

半俗退士

又號無三公子

金岳公子とふやんぶとあき御人の戯号と

謹言八百三虫傳

一冊本

此書ハ刊行せし其画も自画めて精妙あり又拍堂奇譚品王連

紙半

形草双紙
六冊物

画ハ英泉序ハ馬琴の代作めて弘化二年書實甘泉堂刊行

此餘るも論御箋注盲牛又ハ雜劇正本の作ありて最妙なり

鬼卵

栗枝亭と号す

東海道日坂の住人之遠州著述の讀本数多あり京師

浪花の書肆より發行せり煙草を弼助と業とを表れ

障子

世の中お人多葉粉のようハ煙とありて後にてり此

斯詠たる狂歌を自筆にてかいつけ置を伝ふ或年
白河侯 樂翁公 御通行の節此狂歌を以覧ありては褒美
被下しと云々此事根岸侯 御奉 隨筆み袋にくと云々
記あり一時柳亭先生へ消息して門人たゞんと云々が柳亭
固く辞せしと云々

茲は鬼印の小傳を出すは最粗陋なり同人の作に専ら大攻を刊行
しつゝ宜しく京撰乃戯作者の部に入ふなり且同人の事跡も亦数
多し因て黙老が京撰戯作考を委しく出せり

次は出で肖像ハ稗史小説の繪づく浮世画師の肖像と小傳
あり浮世画師世上は多しと雖も左に記す其純粹なる者なり

北齋爲一翁 三浦屋
八右衛門

俗稱を中島錢藏といふ名の辰政字を雷震といふ初め北
尾氏の門に入り北尾と稱し又春調といふ中頃俵屋宗理と
改め専ら歳旦等の摺物の繪を画く又群馬亭錦袋舎
葛飾爲一翁の數號あり卅双紙の作をあるは時太郎可候と号す
此翁名と住居を替ふの癖あり當時ハ本莊邊に住むと
いふ弘化二年の頃年齡八十餘歳浮世繪を廢止して和
画をあるは細画をとかく仕うといふ處に俗に誦ふ一時人
なり娘ありて柳川重信に嫁せしが離縁して今家もあり

此婦人も崎人にて當時^{弘化}三十歳餘画をよくし且至て
 器用なり土偶人^{つちうじん}を造るふ妙きなり一日土を以て町家の娘や
 町藝者と深川妓姉三人にてきり羽子を突く偶人を作る其精^情
 態髮形の体真のどし又此婦人至る火事を好みて夜中と
 いふ十町廿町の場へ見物に往く事屢なれども北齋も敢て
 是をとりめむ俱に崎人といふなり
女子三人は重香(信友)の嫁なり早世して死にあり二女も他嫁ありといふ
 今内子存る爰より所の女子は第三女なり
 北齋の門人夥し江都のよりば京振尾張あとも多し画は版
 行の本数多あり北齋漫畫^十通俗三國志畫傳^十通俗水滸畫
 傳^三其餘枚舉^三に遑はらず爰に浮世繪類考を出る

嘉永二年己酉四月十七日没

法名 南総院奇譽 北齋信士 行年九十歳

爲

一

公羽

辞世

人魂^{こころ}をききまへや

夏^{なつ}はれ



漢^{かん}泉^{せん}画^え 東京^{とうきょう}

一陽齋



貞圖

蕙齋老人



漢高
兵泉画
京

飛

蝶

樓

ウ

貞重画



豊國先生癡筆出韻

一陽齋歌川豊國本姓ハ倉橋父を五郎兵衛と云々寶曆乃頃
 芝神明宮に邊ふ住し木偶彫刻の技業を以て自ら一家をなせ
 る曾て俳優乃名人市川栢延の肖像を作るふ妙を得たり

明和乃初み豊國を生る幼名を熊吉と稱す性画を嗜む故
 ふ歌川豊春ふ就て浮世繪を學ぶ依て歌川を氏とて頗出
 藍の才あり長ふ及て俳優者流乃肖像を畫ふ妙を得て生

氣活動神在る如し或る美人時女乃嬌態梓本彩筆諸國
 流行一華人蕃客も珍なり求む茲を以一陽齋の号日の昇

るが如く豊國の名一時獨歩一画風自ら一家を成り朱門の
 貴公子も師とし學ぶ門人画業の徒なり於て良才乏しと云ふ

實小近世浮世繪師の冠多し惜哉一陽齋享年五十七歳
ふて没せし時子文政八年酉正月七日也三田聖坂弘運禪寺に
葬ふ法名を實彩天毫と云遺愛の門人等一陽齋乃義子
今の豊國や量て亡師に遺筆數百枚を埋て碑を営み亡公翁
乃友人等も為力を助け櫻川慈悲成子成て余が燕辭を需
む余もまた亡翁の舊識なり故に固辭する事あるは其事を
記て之を答ふ

狂歌堂四方真顔撰

文政十一年戊子仲秋

淫世祥筆

山東庵樵者京山書并篆額

翻蝶樓國貞

俗稱を亀田屋庄藏といふ豊國の門人ありて出藍の譽あり
京本所立つ目の渡り船の事を管す因る五渡亭の號あり又香
蝶樓翻蝶樓月波樓の數號あり往歳

大御所様本所御成の時国貞と呼ばれて御前にて浮世繪を
画しめ給ふ国貞即坐し頼政鶴を射る菖蒲の前を恩賞し
賜ふ猪俣太と俱し鶴を荷らて歸るを画し最善出来し

大君大子賞し給ふといふ稀代の名譽といふなり性至孝なり其母の

肖像を画し座間の床に懸置朝夕是を拜す父ハ国貞が幼年の時
死して其面貌を思ふ

師豊國の像をも同く懸置る豊國没後小田子
ありといふも画を好みて餘の業をなせし故同門の徒相諺る天保

十五年國貞を勧め、豊國の名を嗣ぐたり。國貞其業は精
神を竭すこと最勉勵せり。點老嘗て一神仙の像を画せしめ、
國貞大に喜て曰く、當時僕に画を需むる者夥し、といへども皆是
俳優娼妓の肖像、或は相撲人、乃似貞讀本の差繪、冊双紙の類に
て、潤筆は多く得ることも百歳の跡後世に傳ふる物を爲すべからず。
今此神仙の圖を命ぜられ、僕が大幸なり。いふに、其画を出し入せ
るは、妻子も度毎に手洗ひ、切火打して、いそ大切に尊崇せしむ。此一書を
以ても業成るを閑にすべし、此を見ざるは

安政二卯の年、古稀の齡に至るより、諸友人の所々に從ひ
西國橋東の割烹店にて、年賀の大會をあり、其劇作の諸大人
三芝居の作者、諸俳優、北里の志ハ奴婦の類、市街の俠客、雇役
の頭より、ての贈り物、車に積み、臺に充て、かぞへ、盡し、ごころを
あそ、國貞も亦乙う画さる、故人長壽の人の画像のみき繪み
手拭を取る、て、それく、一贈る、思

天皇二十二年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十三年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十四年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十五年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十六年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十七年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十八年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇二十九年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十一年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十二年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十三年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十四年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十五年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十六年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十七年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十八年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇三十九年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇四十年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇四十一年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇四十二年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇四十三年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

天皇四十四年春三月乙未朔己酉天皇幸泊瀬

